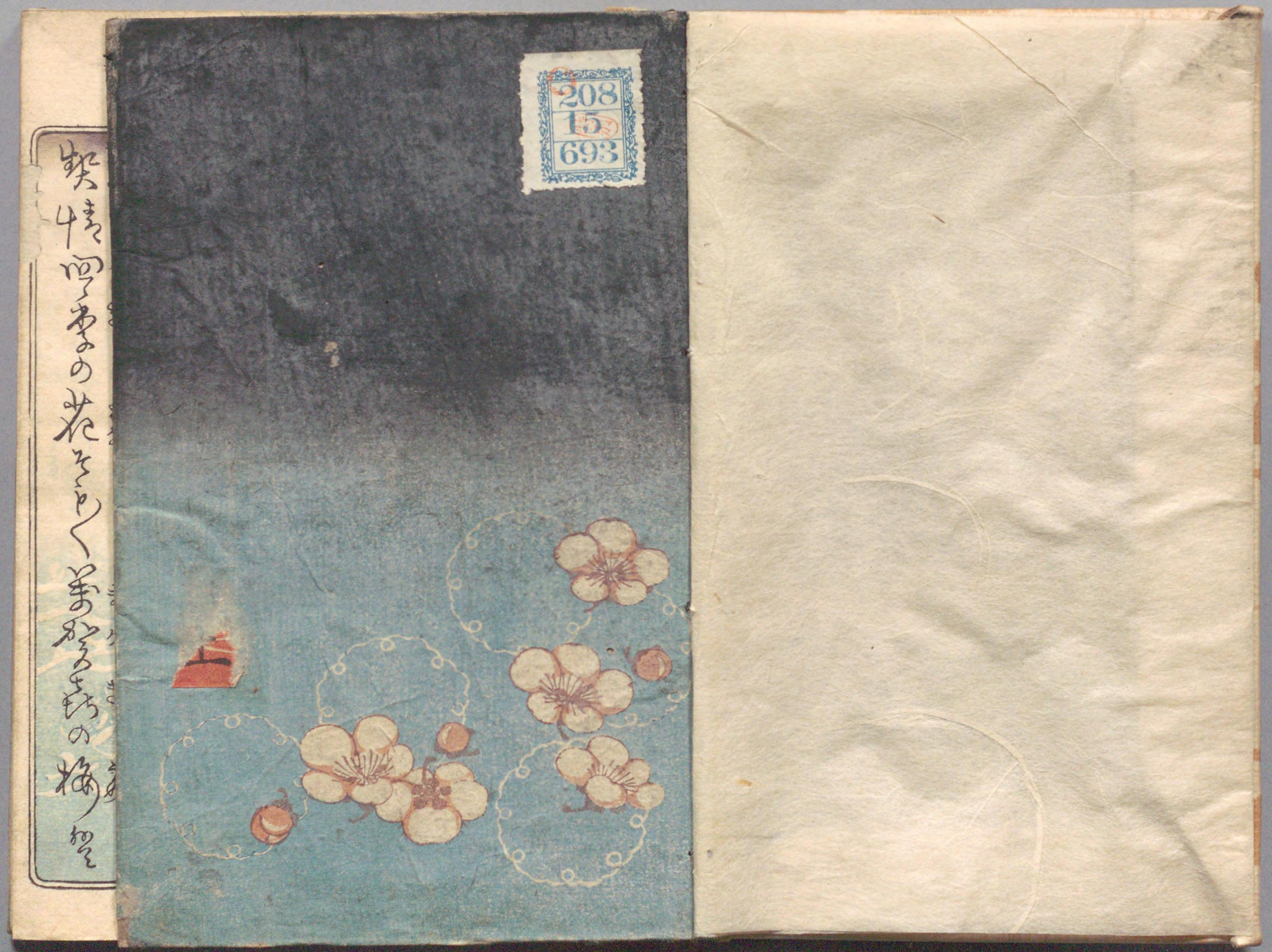
春色籬の梅

十三

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用



国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

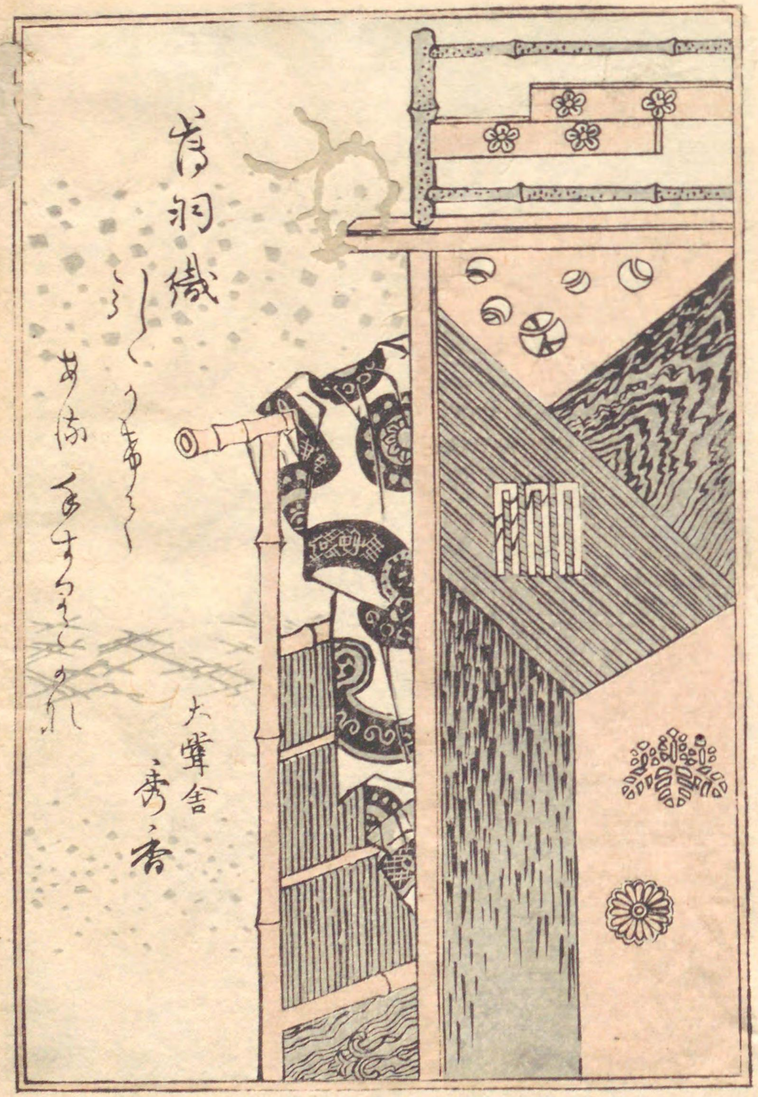
ガラス使用

春色雛の宇兎 五編

因毎夜毎に笑かたくに形きたるを種おれ
袖兎きすまば若留分の裏表袖の満地の穿く
因人のうらみ二重子三重子若紙底紅の恋しよ人
よ茶屋や袖の梅ぐ濡はぬめい心しき省ちふも
世ひるを花よあくぶるるなうしく程文章ぐ寄
契きて四季の花そとく美ぶるちの梅

国立国会図書館　春色雛之梅 15巻 208-693

ガラス使用



江戸

神田居 爲永春水誌

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

マカキ 五ヘンロノ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

マガキ五ヘンロノ三

春色籬廼梅巻之十三

江戸　狂訓亭主人著

第五回

土一升に金一升と古く覚えられる下戸の常の飯も花の塩合巻
実も賑らぬ芝居町茶屋ぶ行灯の桃灯ハ幽霊と艶ぎ
焼町盛塩ぶき門口へ小便をくぐりて這入る狂言ハ本戸
登者宣言さいくるの伺ひ完ぶ〜第ひ〜ぶ〜車へ乗親方
お見ぶ〜度往返入やぶ子五　茶亭ハイヤ宣さんお早いまひ度ハ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

由五郎大仕合せ　重　我が子ながらも遠入らるるとてくるり
やせんのサ才一役者気ぐ紙ぐぎろわ母さとうのヲ先歌右ゑ門ハ
勿論サ丈ハ関三十郎の親方ハ坐右丈ばらう丈丈さの者
サさその上ハ三井ゑきんが　三井ゑ仁三郎の名人さ大造立
丈仕ゑ成さ新狂言ごとのふうら寄りの狂ひやうこのサ　茶屋
でも愛で一臭仕るひけつやつ行やせん　重　今度ハ沢山
利用やとま私も遠慮く別座でもとうらくやうく
トキニ円茶屋くまト奥の方さう　重　現く　茶　ヲヤなぜ寄う今度

猪きんが奥へ居るうち丈うさ数ごとうマアおとうさ
折しも此家の内義を結仕兼て　女房　ヲヤ丸宮
きん結出さまとうさま行ぐ豆手所ハイて居ぐ豆手
ヤアこの豆一昨日の晩ハさぞお困りぐらうこと　重　ヲイヤ
モウ宮ハ困りせるじゃ　ろひさまへ丈ぐもアあの旦那ハ
気ぐ人ぐらう手所ぐ得意さみハ　女房　ヲヤ　嘉ハ
強ぐらるのものが生奥ぐらうみ　重　ハ　遠ひるひよ　女房　ヲヤ
実ハ強ぐらるひと言ばあの奥へ居ろ嬢るんぐ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

義もよう顔も縮まる上実ハ真うてハ安堂寺町
ハまるうち義兵衛さてそして欲深ものハ再
然ルニ不幸ハ打つくりて弟ハ縮ラチトキ今月ハ病病ハ治
ハご程方ろノ事ハ世ノ中ハ様ハ其ノ世ノ繁を結てハ病と
言ハ[illegible]郎時私の妹で待て世ノ中ハ[illegible]車ハ五位
ノ小儀さんのうるハ事ハ車ハ[illegible]ハ位方ハ
西[illegible]義さので社[illegible]屋ハ女ハ[illegible]引ハのうんのと
らハのどやうまひどよ物ハ町の貴賤ハ世ノ中ハ[illegible]て

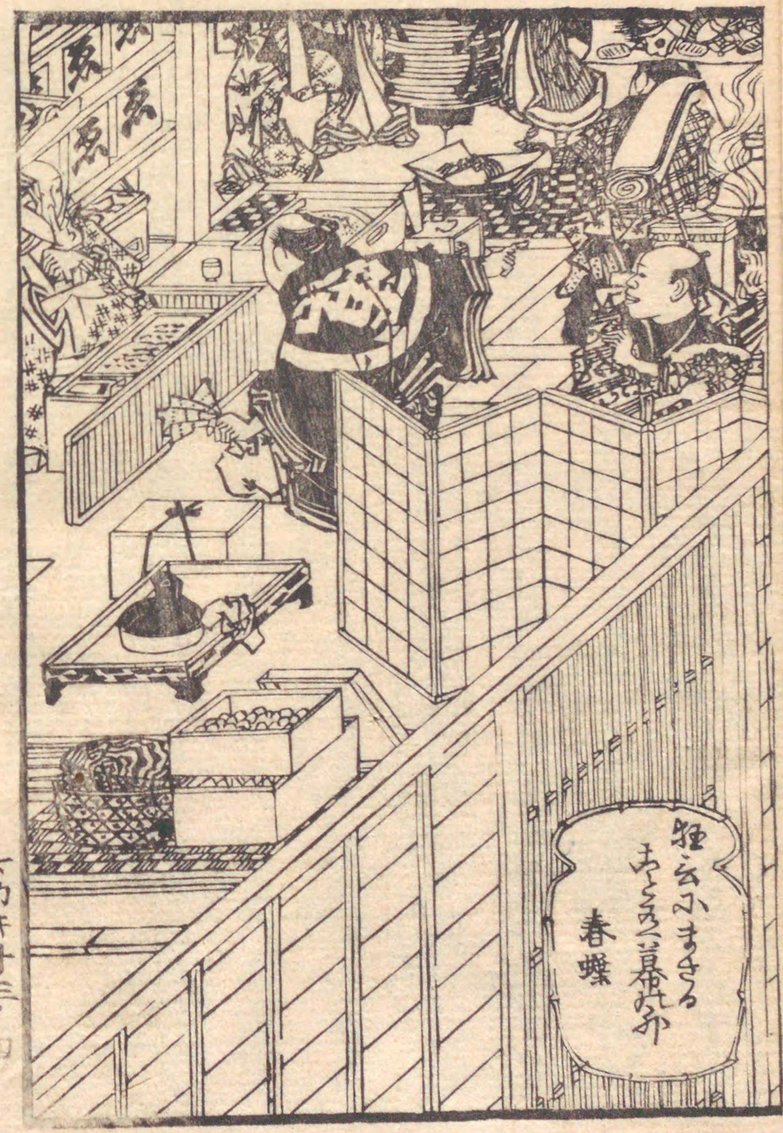
二

言ハ小儀も合ハ悪ひとのハ[illegible]ハ彼家ハ[illegible]ハ
うるハ変ものハ[illegible]世話でハ[illegible]ハ
預りておわて呉ろとハ故ノ保養ハ[illegible]ハ
車ハ左様ハ実ハ私ハ今日来るのハ小儀女の
変ハ身て お世しハ[illegible]て来ハ[illegible]ハ
変て おなさらハ夢ハ知ハ[illegible]ハ
幸ひでどざハ まハト言ハハ世ハの若者費ハ
男芝居ハ帰ハ来ハ風俗ハて 様方ハ様ハ

まゝ亭へ四苦労〳〵お招ぎ不義〳〵やうなる
たゞノ少 作へイ五十二 往ぎざわまゝ栗の木機会の二ゐ和と
西の高土間へ入まで活つまゝ〳〵さうみ 亭へ十二そまゝ〳〵やう
亭他まゝ拾ゐゐ場はあるまゝ 作へイ五十二 只今三條綿
堀の春兵さんと富貴家町の河岸でお用ふうまゝ
たゞ見ゐ芝町の二芳屋へ島屋頼を出してまれゐ
帰つまゝ芳ゐ出るの上場をまゝ行て昼て昼ゐと出言
成ゐ真木玄関を尋ねさけまゝ不機嫌活て

十ゐ来でまゐてゐまゝせん亭へ結ぎゐゐお一人ゐゐ
お處で家門ゐ入やまゝお客の土間へ割込で貰ゐ拾ゐ
ナまゐて来ゐ往ゐ作へイ五十二ゐでまゐてハ
お出ません吹ゐゐお連が四人もお出成と中ゐて居ざわ
また亭へ結ゐまゐ支ゐゐ斯まゐゐ藤新さんの新橋へ行
らへといゐまゝ東の一ゐ丸で明て居ゐ彩橋のお家只明
同人延さといゐ拾ゐ支を出ゐゐ安を断て仕方へ入ゐゐ
作へイ、ホニ 新橋の横辺ハ奴東洋あ代さんでおざわまゝ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用



国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

今ッ芝居で居るを見ようとて清ぬ代さんの妹のお袈さんと
の娘がちるの二ツ見あして居さ所へ清ぬ代さんと同伴の
お客様へ上るのごとつて迎ひの人ゲ来まさまざらく
新橋のハ延引ふ遠ひどぎわるません再ハそれごろ春久
さんの速ハめてあくするぶ徒ハ左様いうまもうイヤ
お客ふ言分で松酒楼へ行て来るのごつけ車ハ来さしの
ごよ今度ハ高ハうごらみ行でも同の廻様よいちご
あくあろうちゃ手紙まへそして今月ハ吉ふ見ハ なんが

一カキ十三ノ五

ハ二十二吉の野帝ハ親方の代来ふ客人大明
神へお参ふ行やしと行でも今度ハ富さんうんぎ月ふ
つくあやうあうませうみとまで小判形をして見る
車ハ行ハ行ハ行

も知りてお伝は成ごとくガア／三田行岸の旦那がこ毛非
毛非山猫女と世間へ伝授と出伝のサマ　高へ上そそぶも
あの嬢あやア　重へサノ甚處でどざるまた夫の分て又行く
と入組ごお伝がどざるまた両方の真を一度ゐ伝ーー中
ちやア些こうるうるゐ相ごぶ昨日杉酒の三階で伸ち町の
一文字の文嘉さんゐ逢やーーさまゐ伝ーーてら小猫
きんのうを委ーー義れて居るまとりて杉ゐ伝歳ゐ
今度ゐ杉ーーいゐ四で二四行岸の旦那ぶ小猫さんを世

六

話ゐ伝相と言ふ成ゐ付て折行町の方でも手紙の乃
ゐる旦那の吉ーーゐ行ゐ毛相ーー訴も言れを
然うと言て小猫さんゐ義ゐ義ゐでーーゐ
訴ぶ私も義ーーゐ人ゐ對て小猫女の臭の上のーー伝
頼まれて清金て変ーー河もゐーーゐ今更小猫女を手紙る
吉ゐーーて浸日ゐ言解ぶ出来ゐ義ゐ毛ゐ又折
行町の家ゐ変ゐ二四行岸へ断も言ゐーーひとのーーゐ行
町の婦人と相談てゐの嬢ゐ行ーーゐ難癖でも付て訴を

きるとゆへ拾る言葉をとらへて表の座の方へ引ぱりあ
が仏様ごらへと言成まゝこのサ　文考ヘヨキ様子なる程夫も
宜らんが仏様も小磯女が評判の程様ごらう他所へ参るのハ
情ひ様ヨキ子エモ此方へ来て他ハ宜敷ハあるまひまひ子事そ
まどゞ折江町の家内ハ来てお坐敷へ出しと日ゝハ先へひも
仕ゆくゝらんでハあるひ多弾く　ひまとゞ小磯女も嬉まれるゞ
らんー折江町の姉ハも大切の旦那を喜くゞる一像ごらう事
文考さんの相法の方が宜らんとやかゝ言ひ　きゝー姉ハの

方でハ勘定が悪ゝらんス行でも　お互に様をさるまて信切
尽の仲しゞゝ　損金の行路サヨ　重ヘ生名俗ヨ代ハ
まゝ言ひも江戸産ませう。トキニ人ゝの跡の處をやて
仕舞ませう　そ所で文考さんが言成ハ諭
小磯さんハ今難癖を付てかー　評判の悪ひ様ハ風説を
さゝとゝと言て小磯女のひさゝ　表ヘ往て一當
流行と思ひやうゝさ性をまゝる者もあー　新ごゞでゝ
正然として居らまる場ごけハ勘ゝるひもあらんゝ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

もく小後女の父も初とるひくらう伝の卒私ハ海老屋の親
方とも[illegible]相談して小後さんのふも聞て貰て呉と
頼〻生成まゝとんとゝ咲せバ支婦も沼ムして女房ハ
夏人行彼小後と小人順女を連来る時の小後の衣装を
ちくゝ[illegible]して此時代の流行を告まつのせバ
極地の往き山彼ア色の行縅緬へ前ちゝ[illegible]て二筋格
子を織る小袖むこまくハ着うゝべ〜同〻表れ二
を重ね着て黒天鵞絨の小幅いひらゞけを羽ハうて

三八八

結びまゝ上に茶安慶の流球紬の小袖へ黒繻子の
半衿の掛〻を羽折の裾ハ引ゝけうゝ形衣もの
裏ハ本紅ゆて裾まゝしハ白紋ア の那内積うゝ繻半
ハ緋の山繭縮緬ゆて白博多の半衿をうけうゝ今
結ひの髪へ珊瑚珠の三ゝうゞの珠の付〻簪を一
本さして帝三の前ハ来る実ハ主演様金弁一の
美人まうゝべ〜

素顔白くして雪をあざむき おしうれひをふくむる

風情の眼元孫更にうるはしく宣三郎見て感嘆の完
全り給ふ　小ヲ宣さん　秋おかる歳さまみるハ大きふ
○是ハ〳〵第壹の吉兆も双方ゆるめてよろしく
潮ふるのふりしゝば
文房ハアノお嬢さん　折江町の姉上さんが悪〳〵思ひ
お嫁ガ　甚労ハきろけまどそまとアノ　私ガ清金ろまこしも
常ドおきさんヨ　小ハイ　有ろう　行幸　姉上さんの方ゆく
あてお呉成まーヨ　主代アあハ　陸ん　私ガ姉上さんハ

お嫁さんハ高貴員報ーをいろうまハヨ　尊ハイやそまでガ
ちろと　出ス早〳〵山猫ものを一文字ハ　あろせて　歩り　変りんざノ
車ナニ　仏様で　私ガ今　教ハ用ガありて　堀の若行まで　行また
ろう　まま　序ハ　表ハ　藤ハ　まハりて　文都さんハ　悪〳〵せいろ〳〳
ませう　小ヲ　そまでガ　仏幸　仏様ハ　ねしまも　ナガろうまであまた
けまどもお　頼ハ　中まハヨ　そしてよ。アノ　万一　清元の　故次
さんハお　逢ろうハ　私ガ里へ　行ろ　ものまて　秘頼んで
お呉成ヨ　ハの人ハ　実意ろ　人ガ　便ろにまりまた

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

うらうま　女へ　なぜチ　仕廉ハ　細い　梅の　度を　言ヲ　伝野へ　伝て
うらとらのてお茶の　密夫と　墓で　押ぶ　しと　月の　うハ　行ま　姉
ひるハ　多ハョ　他人　便り　だらり　せぶ　ま　此一自　恢を　ぶ　て　れを
強く　成ョ　ト言ハ　長　爰の　烟爰ハ　烟草　伝ハ
分て　小　残ハ　ゆる　折　も　芝居　て　太鼓の　音ドン　ドン　ドン
文房　ヲ　三　ヲ　目ぶ　ぶ　さ　ふ　ぶョ

梅乃花　春永　春矢

第九六回

ぶ　ハ　元　の　ぶ　ぶ　ぶ　さ　ー　ら　仕　ら　ぶ　ぶ　と　あ　う　ち　あ　け　て　ら　ハ　ま　ら　や
おかやもどそん　し　て　藤　屋の　南　力の　動　ま　ん　ら　ら　「番　小　ぶ　ヲ　長　ま　ん
眠いの　至　居　眠　で　し　て　サ　ま　る　ハ　ま　ト　言　ま　ぶ　ら　「長　春　ら　ハ　ま　雪の
藤　を　ち　ま　ハ　と　つ　め　る　ま　ハ　ま　ハ　て　人　ひ　ど　ハ　度　を　ま　る　せ　可　め　い
ま　ハ　ヲ　私　こ　を　可　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ー　ま　ら　ま　九　一　年　と　い　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
今　ま　ま　久　ー　ま　ま　ハ　ま　ま　て　お　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

処のお男ざう　新ふるものゞ　居眠や　夕べ　だらしてお在
なるるョ　サア　お寝でも　長さん　おまで　下わゞ　て　目を
覚して　お寝るるこのト　横口をきゝして　長さふ　出る
長〳〵ドレそんなら　一ツやらるそよの　小〳〵ヲヤ　ホンニ　気が　付ち
きんざが　お来たん　何時　元服を　あつのゞエ　長〳〵エ　十二　去年
の冬ョ　小〳〵そう　ゑエ　そして　今でも　あるよう　小梅　ゝゝの
姉さんの　新ふ　お在のゞエ　長〳〵イヤ　小〳〵ヲヤ　何の　所ふ　そ是
ちやう　お主なるのゞエ　長〳〵十二　今ゝ　内も　何も　ゝ　サ

まゞ　十二　十一

小〳〵アレサ　戦ニ言ゝ　ヤア　なへョ　長さん　實庵を　お言ョウ　長　何
ちやア　ねゝ　實ふ　お主て　宮まろと　住居ハ　祖父のョ　小〳〵エ
そして　まア　何様　お在のゞエ　長〳〵如何ともて　沢を
活潑ば　永い　支ざ　荒も　お来も　新りて　居る
だらゝ　アノ　ゝ雅さんの　お兄さんが　金弟の　女房と
新りなゝ　お花さん　なを　ちろてある　日自を
他人の　居るい　新エ　ぼんで　言なるふヤア　是非　あの
お花を　ゝめ人の　そふ　きて　衣のゝまふ　入て　居るまの

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

伸ばせとうまく〳〵されバ番頭ハ夜立て歩き〳〵若まさ
ゝ様ハ不義ハ有るゝ仕家内ハ有ると
言れ夫へ手洛の額頭ハイとこゝ言ハ〳〵ひけりを於
若さんハ言つゝ所ゞ義ハ佳るさらう沢いゝ又方ゞ一
義ハ有るさらハもしろ問よゝ様さんハ対して
まゝ〳〵あるやうどの世文〳〵矢箭をきるゞ一のよ
とおゝ様ハ〳〵の沢へたるゝ金仏ゞら服元を
有て気強く内を出さけとゞもハ〳〵ゝ有ハ〳〵ゝ意懐ゞ

まぐさ十三ノ十二

殘つて産ハ所へ仕気もゝ〳〵とゝつて水梅の姉れの
所〳〵内ゝ遅ゝゞ仕ごゝゝとゝゝ考へて見ても
仏様もあまとのゝ紙有ハ知ゞおまゝきて居ゝ
原ゝ檜ゝ作あまゝゞ助ゝ作とやゝゞ有呂町の梅里
さんの本店ハ今ゞ様ハ隠居ハ家ハ後見として居る
若ゝ清さんとゝハ人ハ逢ゝてゞ〳〵沢をたるゝ
安ゝ様ハ〳〵でも気の毒ハ〳〵ゝ悪も角も我ゞ
隠居所へ来ゝ紙と若ゝ清さんの行居人

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

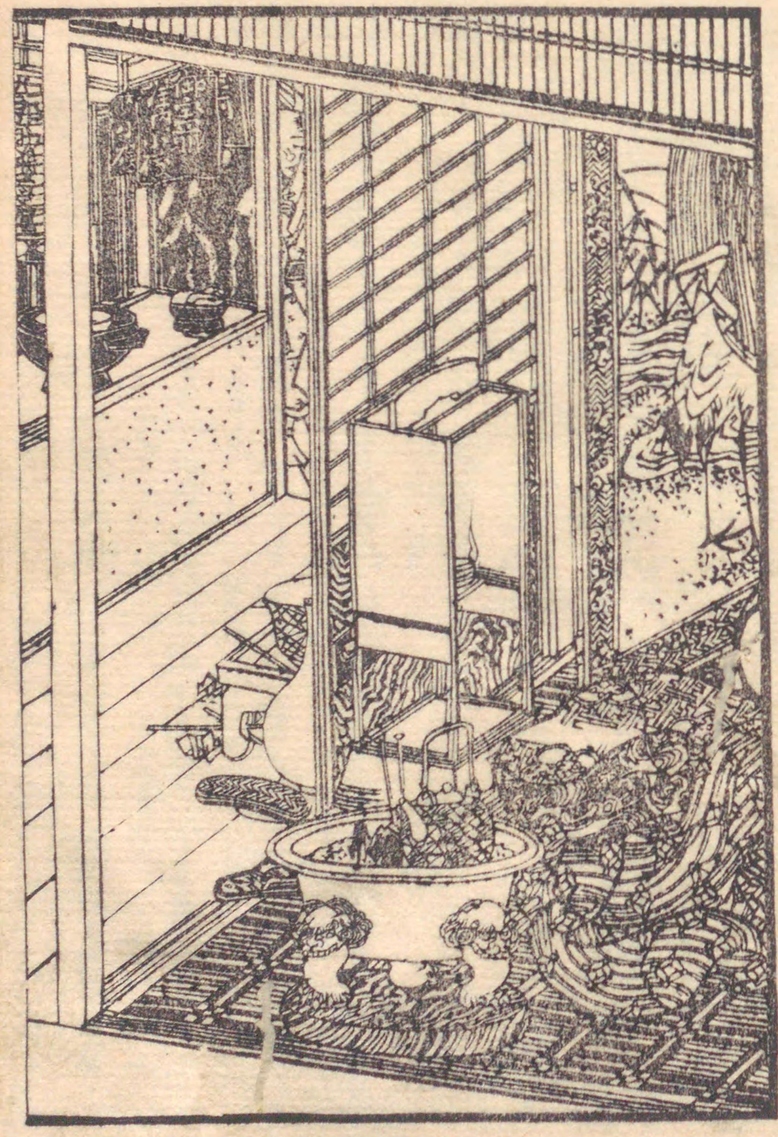
往てもまア かう人ハ身ハ玄関の敷ゐで居て呉れ
どもあんまり他人の家ハべんくと永く居られるあ
でも母 春之助さんも只捨ぢ世て垂てもつまらぬハと
相談をづくて元ゝ身ハ借りて今ぢやア 仕方地へ来て貸
本屋をさらぢやさのヨ ハヽヲヤ 春之助さんの
お世話で 仕方が 窪の内ハ お在の通 長ゝ 然ヨ ハヽうん
高ハねく見ら 毎日でも 顔ぐ見ぶまるとのふうもんどよ
ちう〳〵 商売をおまらぢやア 内もお有んまるぐらし

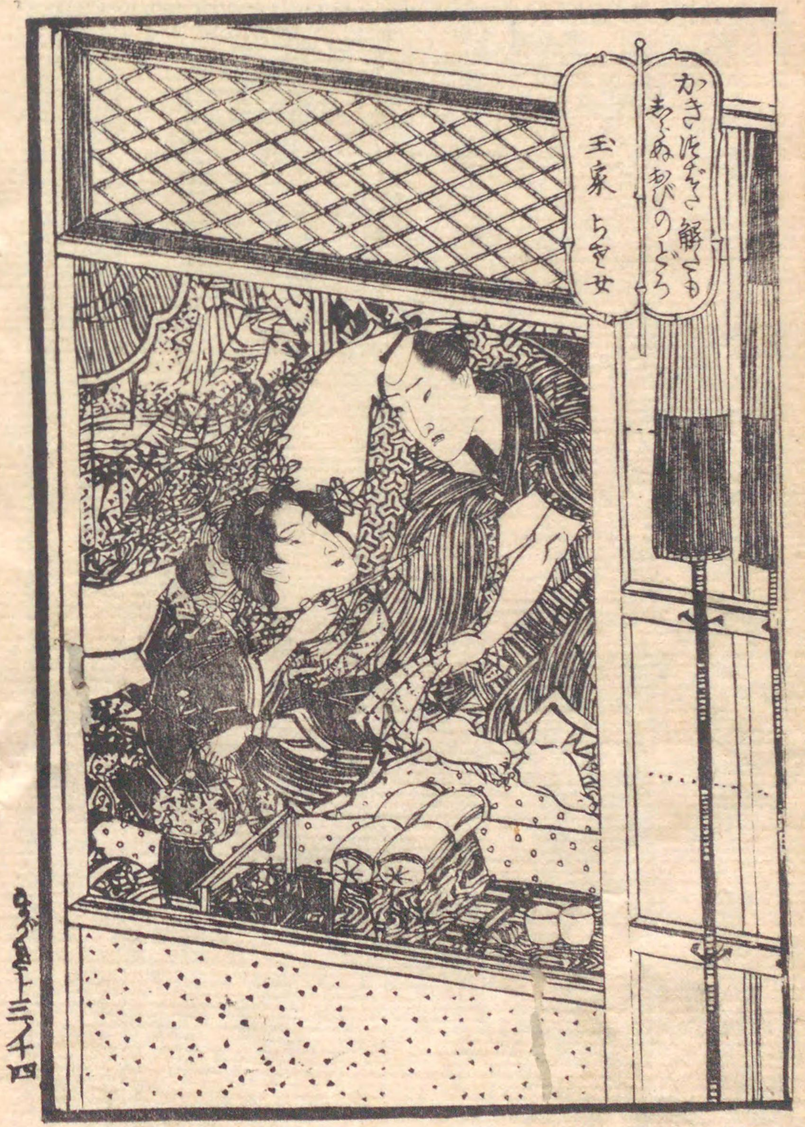
まぐき十三ノ十五

又 お内義さんもおあるぢらうよ 何も 千代様 お頼しで
身ハ内でも 能ちよ 手理ハ 往ちゝ まゝ〳〵 まゝ ハヽ長ゝ
有物をねくとのふあるナ ハヽ 三
居ること お言じやア 身ハ五 長ゝ 身ハ
けまでも おまと 様ちさ 内ハねくのヨ 方ぐく往て 寝ち
起ちりして 世話ハ 身ハて居るのサ ハヽヲヤ 三
お内義さん 至やたう 方ぐ 喰ちふちをの五ハ
長ゝ 女房ハ ちうさ 一人ハ ハヽ 仕方ハ 三 往て言て

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用





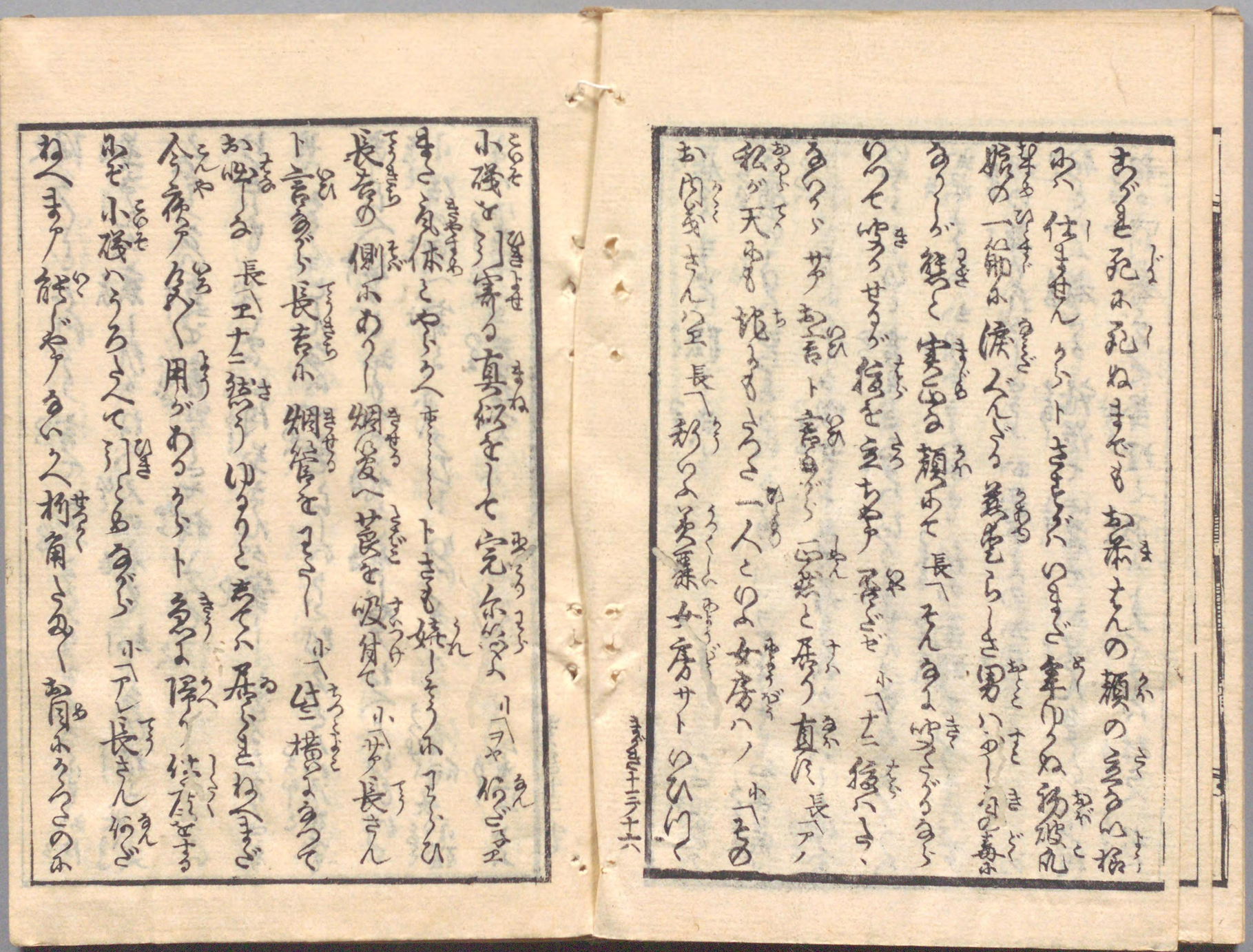
国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

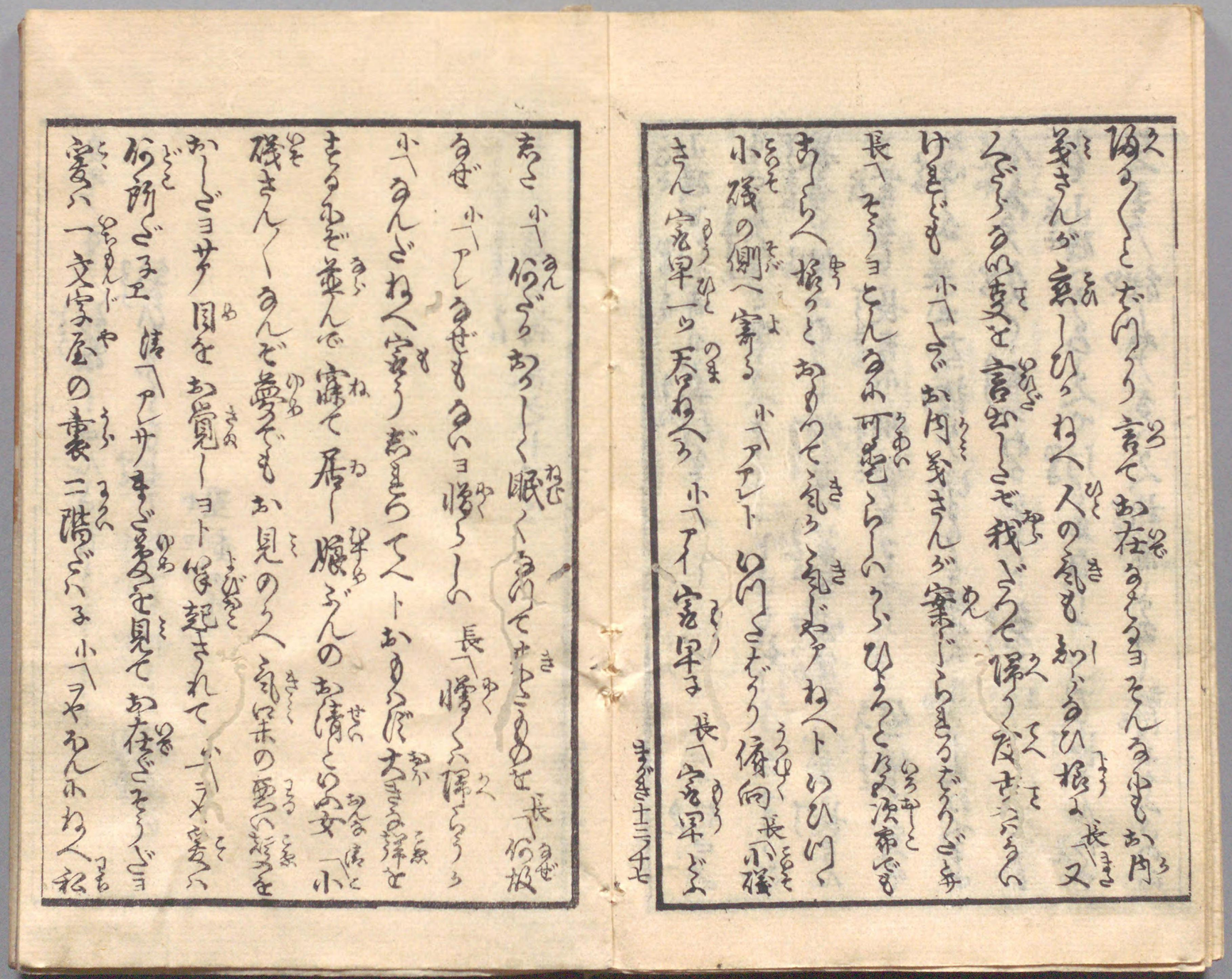
お国世　長へアア　言やにめく　かへアレサ　人ぢうーる言掛て
いつるひとおとこでも　ゆるるうちゃア　義おーるヨ　サア
何所のなんとかふ　人ぢゃト　ゆーし　多後ふて　言葉い　力せ
入てのふ　長へアムムムムム　手拭ふ　手ぬふ　ふるりて　ゆかてくるるも
ねく　かへ　ままごろて　私も　ゆーて　ゆ　顔も　ゆへま　サアおまで
るのと　剃るヨ　長へ　ちゃや　真平　ゆ　見ざそんるふ　活況で
ゆ世　拾ア　アア　おゆの　方を　ゆ　よでるくゆ　ちゃア　かへアヤ
私の方を　ゆ　ゆ　長へ　ナニノ　ひとおゆが　真ーーーでもおれて

まぐき十三ノ十五

ゆ　ゆ　ゆ　



まづまづ死ぬ死ぬまでも おあきさんの顔の美しさ
ゆく 仕ます ト さきとぶ いのまど 拳りつね 彷彿
脇の一節ハ 涙ぐんだる 美色らしき男 ハ ゆ ゆ 母の毒ハ
ゆ ゆ ゆ 結ぶ 実ハ ゆる 顔 ゆて 長 ゆ そん ゆ よ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ
ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ



久しぶりとだけうり言てお在なるそんなるもお内
義さんが京しひっねへ人の気も知らぬひ振よ長き又
くどくどの文を言出しさぞ我ごろて帰りて度ごとの
けまでも小へしてお内義さんが寄ごらきるだろうご毎
長へそうしょとんなる可笑らしいうふひろと久次郎でも
あらへ振りとおりつて気ろ気どやアねへトいひ
小磯の側へ寄る小へアレト小磯向長へ
さん宅早一ツ呑ねへろ小へアイ宅早ま長へ宅早ど

まぐき十三ノ七

ちと小へ何ごろおろしく眠くなりてかきもの長へ何故
なぜ小へアレなぜもないョ悪らしの長へ帰ごろ帰らうろ
小へなんざねへ宅ろ宅ろおまちてへトおるふぶ大きな洋を
きるふぞ義んで寝て居へ腹ぶんのお清とのふ女小
磯さんへなんで夢でもお見のへ気ほの悪い話を
おしごョサノ目をお覚へョト仰起されて小へ又宅へ
何所ごろエ清へアレサまぐ変を見てお在ごそうごョ
宅へ一文字屋の裏二階ごへ小へヨやるんふねへ私

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

208
15
693

きやゝ　きゝ　仏様しうんざらう市ゝゝト

紀ひうぐゝもおし　鬱もの　清房の

丞剣の達ゴウンゝゝ

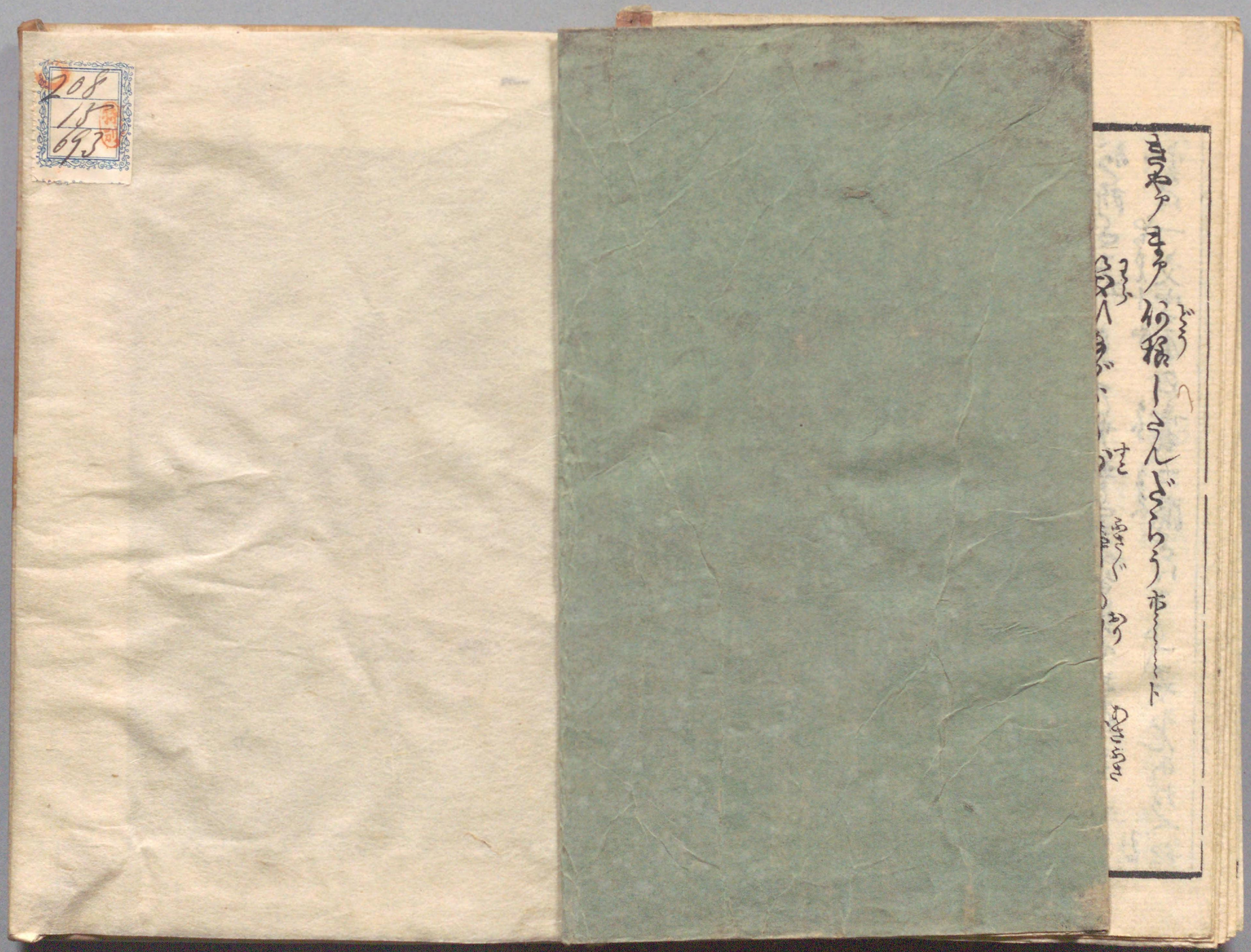
春色籬の梅巻之十三了

春色籬の梅巻之十三了八了

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

208
15
693



国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用